

学びは常に玉川の丘に用意されています。
通信教育部で学んだ先輩を中心に、現在の仕事や地域での活躍をインタビューします。

生涯学べ第15回 絵画の修復で伝えたいもの



増田久美 絵画修復家
1993年通信教育部に入学

1993

修復工房へ入って1年目。先輩を手伝いながら、懸命に技術を覚えた。変形や劣化などの処置をして、最後に色調を整えるために補彩する作業



絵画の修復とは、汚れたり、損傷した作品を表面だけきれいにするのではなく、できるだけ元の姿に戻す作業です。作品には寿命があるけれど、修復によって後の寿命がより良い形で延び、また多くの人の目にふれて何かを感じてもらえる。それがこの仕事をする喜びにつながっています。

修復の世界へ入ったのは二五歳のとき。大学時代、美術の講義で修復という仕事に惹かれ、専門学校で絵画の古典技法を学びました。

作家が絵で表現したかったものを、時を超えても残したいという願いに寄り添いたい

縁あって修復工房に就職できたのは本当にラッキーでした。

工房での仕事は、美術館や画廊など絵の持ち主から状態が悪くなった作品を預かり、修理してお返しすることです。一度壊れたり、歳月を経て劣化した作品を元の姿と同じように戻すことは不可能でも、できる限りオリジナルの状態に近づけていくのが修復の考え方。そのため、材料や技法は厳密に制限されています。たとえば絵具が欠けたところに

色をさす補彩の処置でも、昔は新しい油絵具を使い、周りまで塗り重ねて目立たなくする処置をしていました。けれど、それでは元の状態を変えてしまうため、欠損部分だけに詰め物をして絵具層の厚みや筆跡を再現し、その上に容易に除去できる材料で補彩します。

同じ油絵でも、状態が違えば処置の方法も異なる。経験を積み重ねないと技術は身につかず、毎回違う作品と向き合うたびに、新たな勉強を求められます。

実は工房へ入った年、私は学芸

1996

通大時代、球技大会で一緒になった仲間たち。スクーリングでは年齢や職業などが異なる様々な人たちと出会い、仕事以外の世界へも目が開かれた



2005

文化庁の新進芸術家海外研修制度で、1年間スウェーデンへ。テキスタイル、紙、木彫など異なる分野の修復家とともに学び、病院では壁画の修復をした



員資格を取るよう勧められ、玉川の通信教育部へ入学。社会へ出て学び続ける方々には刺激され励まされました。修復の仕事に追われて資格取得は叶わず、九年目に退学しましたが、新たな学びの場へ背を押されたように思います。二〇〇一年に修復家として独立。

の一場面といわれ、独特な装飾文様が見られます。使われた顔料の色彩も鮮明によりがえり、ラピスラズリの青はびっくりするほど綺麗でした。五世紀から八世紀という時代を考えると、これだけの色や図柄が残されてきたことは素晴らしいと思います。

博物館での仕事には、歴史や文化にふれる面白さがあります。一方、腰を落ちつけて仕事をしたくない気持ちも強くなり、伊豆高原に自分の工房を持ちました。一つの作品とじっくり向き合い、個人の絵画を扱うことも増えています。

数年前、六〇代の女性から「父が描いた油絵を直してほしい」と頼まれ、長野のご自宅で修復しました。私の横でお父さんの思い出話をされていたことが印象的で、今はご自身が描かれた日本画をお預かりしています。七〇歳近い方も中学の頃に金賞を取ったという習字を持って来られたり。そうした気持ち嬉しいです。

私にとっては、対象が個人のものでも、美術館の作品でも、修復家としての姿勢は変わらない。大切に残したいという思いに対し、誠意を持って仕事をしたいですね。

2010

静岡県の伊豆高原に移住した両親の老後を案じて、この地で修復工房を構えた。個人が大切にしている作品を扱うことが増えた。額装する日本画のパネルの下張りをしているところ

四年前から参加しているのは、中央アジアのタジキスタンでの壁画修復事業です。ゾロアスター教、仏教、イスラム教を信仰していた時代の遺跡から数多くの壁画が発掘され、国立古代博物館の収蔵庫に保管されています。そこでタジク人の研修生と保存修復作業を行っています。

発掘時の状態のまま木箱に納められていた壁画の断片は、修復によって安全に展示できるようになる。図柄が明確にわかってくると、壁画の重要性や歴史的な位置づけの解明が進みます。ゾロアスター教の宮殿から出てきた壁画は神話

文化財の修復とは

絵画、彫刻、工芸品、書籍・典籍、古文書、考古資料（出土遺物等）などの文化財の修復とは、作品の損傷や劣化の速度をゆるやかにし、オリジナルの部分を可能な限り残していくことが目標。

一般には、応急修理と本格修理がある。本格修理では、事前の徹底的な状態調査と、それに基づく修理材料と技術の選択が必要。修復においては、文化財、人間、環境に害を与えない材料や方法のみを選択し、いつでも除去可能なものを用いることが原則である。

修復は、オリジナルと修復部分を明確にし、使用した材料や処置方法、観察結果をはじめ、作品に関わる情報は詳細に記録され、写真資料とともに管理される。少数ではあるが、日本においても大学・大学院で保存修復を学ぶコースがあり、経験を積むには修復のための工房や研究所、美術館で技術を磨く。

増田絵画修復工房
静岡県伊東市八幡野1282-81 高原中央館2F
☎0557-53-3587



油絵の変形修正作業。絵（キャンバス）を木枠から取り外し、周囲に紙の帯の張り代をつけ、ひと回り大きな仮枠に張り込んで引っ張り、変形をただす